

住み慣れた場で迎える死

「みとり」語り合おう

新型コロナウイルス禍を背景に近年関心が高まる、住み慣れた場所でのみとり。一方国内では「死の迎え方」について、当事者や家族らが語り合うことをタブー視する風潮も根強い。誰もが必ず迎える最期について日頃から向き合い、理解を深める場を提示しよう。南松本訪問看護ステーション(松本市双葉)がみとりを語り合う試みを始めた。(有賀文香)



訪問看護の現場のみとりについて語る丸山所長(左)

南松本訪問看護ST 理解深める場 提供

訪問看護に携わる看護師が各地に出向いてみとりの現場を語り、参加した市民の体験や悩みにも耳を傾けながら身近な人の死について考える。8月末に松本市並柳4の集い場ふらっとで第2回が開かれ、ステーションの丸山美由生所長が参加者10人を前に、筋萎縮性側索硬化症(ALS)の女性(60代)のみとりの経験を話した。

薬剤師だった女性は英語が堪能で一人旅も楽しむほどだったが、高齢者施設に入所し、病気の進行とともに体の自由を奪われていった。胃ろうや気管切開、人工呼吸器を望まず、死期が近づくと家族が泊まり込みで過ごすなど最期の時間を惜しんだという。主治医や丸山所長も可能な限り付き添う中、大切な人たちに見守られながら息を引き取った。一方「あれで良かったのか」

と今でも迷うという女性の子供の言葉を紹介。丸山所長は「どんなに話し合っても納得しなかつても家族の不安は大きい。だからこそわれわれも思いに寄り添い、その人らしさを大切にしたい意思決定を支えていきたい」と話した。

ステーションの母体となる県看護協会の方針を受け、語る会を始めた。コロナ禍で医療機関が入院患者への面会制限を敷く中、在宅や入居施設など「生活の場」で最期を迎えたいというニーズは近年高まっているという。

ステーションは、死期が迫った段階で本人の意思を確認する困難や、意思を尊重するあまり家族に過度の負担が生じる場合がある難しさに触れ「元気なうちから死をどう迎えたか気軽に話せる環境が広がってほしい」と話している。